



幼児期における身体教育指導に関する研究：
保育士を対象とした実態調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉武, 信二, 中谷, 奈津子, 木曾, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003067

幼児期における身体教育指導に関する研究

—保育士を対象とした実態調査から—

吉武 信二¹⁾ 中谷奈津子²⁾ 木曾 陽子³⁾

1) 大阪府立大学大学院人間社会学研究科

2) 大阪府立大学人間社会学部

3) 大阪府立大学大学院生

要 旨

大阪府下の保育士184名にアンケート調査を行い、幼児の身体教育に関する現在の保育環境や意識などについて分析し、現状の問題点や今後の改善点について検討した。幼児の身体教育に関する環境は、保育者の研修機会や幼児の運動場が確保されているなど、概ね良好であった。また、1日の運動時間は妥当だが、運動の強度について検討する必要性が示唆された。さらに、運動の種類は、複合系の運動をより重視した身体教育が求められた。

保育士の身体教育に対する意識は、運動が幼児の身体発達にとって非常に重要だと認識している様子が認められ、全般的には望ましい状況であった。しかし、部分的には課題点も認められた。特に、幼児における運動の苦手意識が性格形成や人間関係など、心理面や社会面での発達にまで望ましくない影響を及ぼすことへの認識や、幼児期における器用さの向上に対する意識が弱いことなどが挙げられた。

キーワード：幼児の身体教育、発育発達、保育者、運動指導

1. 緒言

現代人は生涯にわたって運動とかがかわることが求められている（田中，2007）。近年、運動不足が原因とされる生活習慣病の問題が大人だけでなく子どもたちの中でさえ表出していることを考えても、適度な運動は身体を健康を維持する上で非常に重要と思われる。一方、深谷ら（2000）は、運動が苦手な子是否定的な自己像を持ち友人関係の中でも孤立しやすいと述べており、運動は心理的な健康にも影響を及ぼすことが推察される。また、及川（2000）は、運動が苦手な子は「小さいころから外より家で遊ぶことが多かった」というものが多い傾向にあることを示し、幼児期の運動体験の重要性を主張している。

したがって、幼児期の運動体験はその後の心身の健康に大きな影響を及ぼす可能性が高く、この時期の身体教育は非常に重要な意味を持つものにとらえられる。幼児期は、スキヤモンの発育曲線にも示されるように神経系の発達が著しく、中枢神経系の機能である運動コントロール能力の敏感期であると考えられており、広く多様な運動を行うことが必要である（吉田，2008）。しかし、中村（2007）は、いまの子どもたちは著しい運動量の減少と基本的な動作の未習得によって、走・跳・投といった基礎運動能力の低下だけでなく、柔軟性・敏捷性などの身体をコントロールする能力も低下していると指摘している。そして、運動量の少ない子だけで

なく、比較的活動量の多い子どもたちについても運動経験のしかたに問題があると述べている。例えばサッカーや水泳といったある特定のスポーツを一つだけしか行わない子どもが多く、運動量は十分に確保されていてもそのスポーツに含まれる限られた動作の習得しかできないことになり、たくさんのスポーツ遊びを経験した昔の日本の子どもたちに比べて、動作の習得の面で大きな格差があることを指摘している。

また、松寄ら（2011）は幼児の望ましい運動遊びについて検討し、運動遊びを行うことで幼児の身体能力が向上することを示し、なかでも様々な動きを組み合わせた総合的運動遊びが最も運動能力の向上につながったことを示している。そして、田中（2009）は幼児の運動能力と身体活動の間に関連性があることを示し、保育活動の中に、幼児の身体活動の特性を踏まえた運動指導のねらいや方法が埋め込まれ、遊びの発展が考えられていることが重要であると述べている。

一方、文部科学省は幼稚園教育要領（2008）の中で、また厚生労働省は保育所保育指針（2008）の中で、領域「健康」のねらいとして、「①明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。②自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。③健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。」を共通して挙げており、幼保連携を強めながら、幼児に対する教育の中で質・量とも過不足のない適切な身体運動に取り組ませることを推奨してきた。しかし、現場でこの指導方針が効果的に機能しているかどうかについては、常に検討が必要であらう。

近藤（2007）は、幼稚園教育要領の中で「健康」という領域の変遷について、おおよそ次のように述べている。かつて、1964年の幼稚園教育要領では、前述①の「明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう」という項目はなく、小学校低学年の教科体育の内容を一斉指導の形式で行うような、本来の幼稚園の教育内容にそぐわない指導もみられた。1980年代になって、幼児の体力に低下傾向がみられるようになり、それがあある特定の運動種目の一斉指導によるマイナス面での影響というとらえ方もできるということで、1990年には幼児期の特性に適合した教育を行うことを基本とする内容に改められた。ここでは、幼児の自発的な活動を推進する現在の内容に近いものであり、「幼児の生活と遊離した特定の運動に偏った指導を行うことのないようにすること」という記述があった。しかし、このことが幼稚園教員の誤解を招き、幼児の自発的な活動に教師が手を出してはいけないととらえたり、教師が意図的に幼児に活動させることは望ましくないとする教師が出現することとなった。その結果、教師が率先して幼児を連れだして園庭で遊ぶ機会の減少を招いた。そのため、教師の研修会などでこの意味について講演や講義が持たれ、幼児の状況に応じて教師が積極的に幼児の活動に加わり、ようやく意図的に幼児の活動が展開されることがみられるようになった。

このように、幼児の自発性を尊重することの解釈一つをとっても、慎重に吟味する必要がある、実際に指導現場で直接幼児たちに触れる指導者の考えや運動施設を含めた幼児の運動環境など、その実態について把握しておくことは今後の幼児教育を考えて行く上で非常に重要な意味を持つと考えられる。そして、適切な運動刺激が供与されているかについて絶えず検証していくことが必要であり、問題があればその有効な対策を検討する必要がある。

そこで本研究では、幼児の身体教育について、実際の現場で指導している現職の保育者を対象に調査を行い、指導する保育士の考えや指導方針、幼児の運動環境など、その実態の把握と現状の問題点を考察することにより、今後の保育者養成を含めたより望ましい幼児への身体教育について、検討することを目的とした。

2. 方法

大阪府社会福祉協議会に協力を得て、2013年度に開催された当協会主催の研修会に参加した現職の保育士184人を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査は無記名自己記入法により行い、その場ですべて回

収した。質問内容は先行研究を参考にし、幼稚園・保育園において実践されている身体教育の内容や幼児の身体教育に関しての考え方について問うものとした。尚、本調査は大阪府立大学研究倫理委員会の審査を受け、倫理的配慮に留意して行った。また、統計分析については統計ソフトSPSS for Windows 11.0Jを用いた。そして、2群間の比較については対応のないt検定を用いて検定し、有意水準は危険率5%（ $p<0.05$ ）とした。

3. 結果

（1）調査対象者の特性および勤務先の現状

対象者の年齢、保育経験年数および勤務先保育環境などの調査集計を表1および図1に示した。これらのデータから、本研究対象者は25～65歳、保育経験年数5～28年の経歴を持つ、大阪府下の保育所（園）に勤務する保育士であることが認められた。また、対象の半数以上の保育所（園）で、幼児の身体発達に関する研修会や組織内での会議の機会、保育士以外の指導者による体操教室の機会、幼児が運動可能な運動場および屋内の遊戯室を有していることが明らかとなった。

表1 調査対象者の特性および勤務先の現状

	平均値	(SD)	最小値	最大値
年齢(歳)	36.34	(8.30)	25	65
経験年数(年)	12.98	(5.41)	5	28

	あり(人)	なし(人)
幼児の身体発達の研修会	140	39
幼児の身体発達の組織内会議	134	44
保育士以外が指導する体操教室	110	73
幼児が運動できる屋外運動場	180	3
幼児が運動できる屋内運動場	156	28

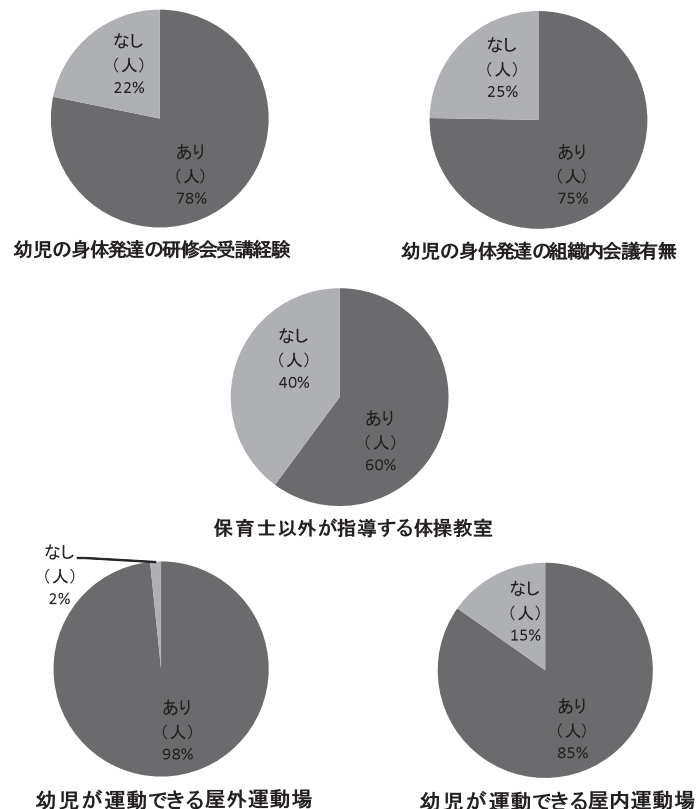


図1 勤務先の身体教育に関わる保育環境

（2）保育時間内における身体運動の現状

保育時間における身体運動の現状については、表2に示した。これらのデータから、本調査で対象とした保育所の保育時間は1日平均約12時間であり、その内身体教育に該当する時間は年少組（3～4歳児）で平均約53分、年中組（4～5歳児）で平均約60分、年長組（5～6歳児）で平均約64分であることが示された。

表2 一日の保育時間内における身体運動の現状

	平均値 (SD)	
保育時間	12時間15分	(46分)
年少運動時間	52.8分	(40分)
年中運動時間	60.0分	(44分)
年長運動時間	64.2分	(46分)

実施運動種別	年少組	年中組	年長組	合計 (人)
器械体操系	115	140	149	404
歩・走運動系	139	142	144	425
球技系	60	119	143	322
複合系	101	118	136	355
その他	49	69	64	172

実施形態	年少組	年中組	年長組	合計 (人)
一斉保育中心	38	45	49	132
自由遊び中心	49	25	21	95
一斉自由半々	85	101	101	287

身体運動の内容については、器械体操系、歩・走運動系、球技系、複合系に分類した場合、全体的に歩・走運動系を行っている場合が最も多く、次いで器械体操系、複合系の順で多く行われていることが示された。また、幼児が運動する際の形態では、保育者が中心となって同一時間に同一の活動を同一の方法で一斉に行う指導形態（一斉保育）中心と子どもの自発的な自由活動を尊重した形態（自由遊び）中心が、ほぼ半々の割合で実施される場合が最も多く、次いで一斉保育中心、自由遊び中心の順であった。

（3）保育士の身体教育に対する意識について

保育士の身体運動に対する意識については、表3に示した。各項目について、5. 強くそう思う、4. ややそう思う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. 全くそう思わない、の5段階で回答させた結果、回答平均値が4.0以上を示した肯定的な項目は、Q5「幼児は明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わっている」、Q6「幼児は体を十分に動かし、進んで運動しようとしている」、Q7「できるだけ多くの運動を経験させることが大切だと思う」、Q16「競争することも含めて運動を実施した方が良いと思う」、Q17「運動の楽しさを感じさせることを重視すべきだと思う」、Q18「遊びの中でいかに運動機会を持たせるかが大切だと思う」、Q29「身体運動は幼児を健全に発達させる上で非常に重要なものと思う」の8項目であった。これに対して、回答平均値が2.0以下を示した否定的な項目は、Q10「運動量を今より減らした方が良いと思う」、Q12「運動の種類を今より減らした方が良いと思う」、Q26「運動の苦手な幼児には全く運動させなくても良いと思う」の3項目であった。

一方、自由記述において、最近の幼児についての感想として、「体力の低下を感じる」「疲れやすい子どもが多い」「身体のバランスが悪く転びやすい」「転ぶときに手が出せず大怪我をしやすい」「集中力がない」「持久力がない」などが比較的高い頻度で記されていた。

表3 保育士の身体教育に対する意識

		(単位: 点)	
		平均値	(SD)
Q5	幼児は明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わっている。	4.30	(0.79)
Q6	幼児は体を十分に動かし、進んで運動しようとしている。	4.13	(0.81)
Q7	幼児は身体運動から健康や安全生活に必要な習慣や態度を身につけている。	3.86	(0.84)
Q8	保護者は子どもが将来、運動がよくなる子になって欲しいと願っている。	3.78	(0.80)
Q9	保護者は現在の園の運動指導方針に理解がある。	3.89	(0.75)
Q10	運動量を今より減らした方が良いと思う。	1.66	(0.78)
Q11	運動量を今より増やした方が良いと思う。	3.51	(0.95)
Q12	運動の種類を今より減らした方が良いと思う。	1.87	(0.76)
Q13	運動の種類を今より増やした方が良いと思う。	3.52	(0.87)
Q14	できるだけ多くの運動を経験させることが大切だと思う。	4.15	(0.78)
Q15	一つの運動種目に絞って丁寧に指導した方が良いと思う。	2.70	(0.88)
Q16	競争することも含めて運動を実施した方が良いと思う。	4.14	(0.77)
Q17	運動の楽しさを感じさせることを重視すべきだと思う。	4.32	(0.65)
Q18	遊びの中でいかに運動機会を持たせるかが大切だと思う。	4.27	(0.68)
Q19	保育所外で運動しなくても良いよう園内で十分運動量を確保した方が良い。	2.80	(0.99)
Q20	保育所外でも運動する機会を多く持つように勧める方が良い。	3.57	(0.92)
Q21	体力測定の結果を向上させることが大切だと思う。	2.60	(0.86)
Q22	持久力を向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う。	3.05	(0.88)
Q23	筋力を向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う。	3.15	(0.84)
Q24	器用さを向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う。	2.93	(0.79)
Q25	集中力を向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う。	3.58	(0.92)
Q26	運動が苦手な幼児には全く運動させなくても良いと思う。	1.56	(0.65)
Q27	運動が苦手な幼児は否定的な自己像をもち孤立しやすい傾向があると思う。	2.76	(0.90)
Q28	幼児期の身体教育は、将来の運動好き嫌いに影響すると思う。	3.51	(0.88)
Q29	身体運動は幼児を健全に発達させる上で非常に重要なものと思う。	4.31	(0.71)
Q30	自由に運動させるより、一斉保育を重視した方が良いと思う。	2.74	(0.67)
Q31	一斉保育で運動させるより、自由遊びでの運動を重視した方が良いと思う。	2.95	(0.60)
Q32	自由遊びと一斉保育の両方を同じぐらいの割合で運動するのが良いと思う。	3.72	(0.79)
Q33	自由遊びの内容について指導者は口を出してはいけないと思う。	2.52	(0.86)
Q34	運動施設・設備を今より充実・整備する必要があると思う。	3.50	(0.96)
Q35	指導スタッフの増員が不可欠だと思う。	3.03	(0.97)
Q36	保護者の理解が今より必要だと思う。	3.19	(1.02)
Q37	管理者(園長など上司)の理解が今より必要だと思う。	3.08	(1.16)

4. 考察

(1) 保育現場の運動環境について

今回の調査では、運動施設の広さや遊具など具体的な内容について調査していないため、幼児の運動量の確保が十分に達成されているかどうかはわからないが、表1および図1の結果は、幼児が運動可能な運動場があるという回答の割合が98%超、屋内の遊戯室があるという回答の割合は約85%を示しており、大阪府下の保育所(園)においては幼児が運動できる場所は比較的高い割合で確保されているといえる。

ただし、運動する場所があるだけでは、必ずしも効果的な運動が実施されているとは限らないので、保育者による身体教育への効果的な取り組みが必要と考えられる。春日(2008)は、「実際の教育現場では専門的なプログラムの必要性を十分に認識しつつも、いざ取り組みを開始しようとした時、何から手をつけてよいのかわからないのが実状であり、身体的機能の発育発達にかかわる専門的研究と具体的な施策の提言が急務である。」と述べている。つまり、保育者は身体教育の専門的な見地から、幼児の身体発達を促進する具体的なプログラムを提供することが望ましく、その知識と技能を習得・実践することが必要である。今回の対象保育者の78.2%が幼児の身体発達に関する研修会に参加しており、75.3%が組織内で身体発達に関する共通理解する

ための機会を持っていた。また、保育士以外の指導者による体操教室の機会があるという回答も60.1%を示している。これらのことは、幼児の身体教育に対する取り組みが非常に望ましい状況であると考えられ、今後にもさらに高い割合での実施が望まれるものであろう。

（2）保育時間内における身体運動の現状

表2の結果より、1日の保育時間内における身体運動は、年少組（3～4歳児）、年中組（4～5歳児）、年長組（5～6歳児）とも平均約1時間前後であることが示された。田中（2009）は、幼稚園での運動能力測定の結果、高得点であった幼児は在園中に61分の高強度（4.4METS以上）の身体活動を行っていることにに対し、低得点の幼児は在園中に19分程度しか行っていないことを報告している。これと今回の結果を比較すると、身体運動を行う時間はまずまず適正といえるが、運動の内容として高強度のものが実施されているかについても今後検討して行く必要があると考えられる。

一方、身体運動の種類について、器械体操系、歩・走運動系、球技系、複合系に分類した場合、全体的に歩・走運動系を行っている場合が最も多く、次いで器械体操系、複合系の順で多く行われていることが示された。ただし、年少から年中、年長と年齢が上がるにつれ、歩・走運動系以外の種類も取り組みが多くなる傾向がみられ、年長組に関しては、器械体操系が最も多くなっている。松嵜ら（2011）は、4週間にわたる運動遊びの実践研究の中で、忍者遊び（総合的運動遊び）を行ったグループの子どもが、ボール遊びやマット遊びを行ったグループの子どもよりも身体能力、特に調整力や持久力に関する能力が高まったことを報告している。これと今回の結果を比較すると、現状よりもう少し複合系の運動を重視した身体教育を強調するような研修を行った方が良いのではないかと考えられる。

幼児への指導形態では、一斉保育中心と自由遊び中心が、ほぼ半々の割合で実施される場合が最も多かった。一斉保育は指導者による効果的な指導が期待できる半面、指導される側の子どもたちの運動量や興味関心がやや低い状況を招きやすいという短所があると思われる。また、自由遊びはその反対で、子どもたちが高い意識で運動に取り組むことを期待できる半面、その運動が適切かどうかの判断や、運動量の個人差が大きくなってしまう点で問題となりやすい側面を持っていると考えられる。森司朗ら（2011）は、保育形態に関して、一斉保育と自由遊び保育がほぼ半々の園が、他の園に比べて運動能力が有意に高く、一斉保育中心の園が最も運動能力が低いことを示しており、運動能力の向上という側面でも、本研究結果が望ましい現状であることを支持している。したがって、幼児への指導形態は一斉保育と自由遊びの両方の形態を用いるのが望ましいと考えられ、現状は良好な傾向にあるといえる。

（3）保育士の身体教育に対する現状認識および意識について

幼児の健康について、文部科学省の幼稚園教育要領および厚生労働省の保育所保育指針の中で、そのねらいとされている3つの項目が、本研究で行ったアンケートのQ5「幼児は明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わっている」（4.30点）、Q6「幼児は体を十分に動かし、進んで運動しようとしている」（4.13点）、Q7「幼児は身体運動から健康や安全生活に必要な習慣や態度を身につけている」（3.86点）である。この内、Q5、Q6に関しては、今回の調査の中でも特に点数が高い肯定的な項目に該当し、この点でねらいの達成度は良好というのが保育士の現状認識であると思われる。また、Q7に関しては、Q5やQ6よりは認識がやや低いものの、まずまず達成できていると認めることもできる。よって、幼児の心情面や意欲面はよく達成され、態度面はまずまず達成されており、全般的には幼児の健康についてはほぼ良好に達成されている現状がうかがえる。

幼児の保護者に対する意識については、Q 8「保護者は子どもが将来、運動がよくできる子になって欲しいと願っている」(3.78点)、Q 9「保護者は現在の園の運動指導方針に理解がある」(3.89点)、Q 36「保護者の理解が今より必要だと思う」(3.19点)がこれに関連する項目である。Q 8とQ 9でやや高い得点を示しており、Q 36がほぼ中間的な得点ととらえると、保護者は子どもの運動能力への関心はやや強く、かつ園における身体教育について一定の理解を示している現状がうかがえる。

幼児に対する身体教育で実施する運動の内容に関する項目は、Q 10からQ 20が該当する。まず運動量については、Q 10「運動量を今より減らした方が良いと思う」(1.66点)が非常に低い得点を示し、Q 11「運動量を今より増やした方が良いと思う」(3.55点)がやや高めの得点を示している。保育士の意識としては、現在の幼児の運動量はやや不足気味で、もう少し運動量を増やした方がよいと感じていると思われる。また、Q 19「保育所外で運動しなくても良いよう園内で十分運動量を確保した方が良い」(2.80点)は中間的な得点であるのに対し、Q 20「保育所外でも運動する機会を多く持つように勧める方が良い」(3.57点)がやや高い得点を示していることから、保育士の意識として、園内で確保できる運動量には限界があり、園外で運動を推奨することが大切であると考えている様子がうかがえる。

運動の種類については、Q 12「運動の種類を今より減らした方が良いと思う」(1.87点)が非常に低い得点を示し、Q 15「一つの運動種目に絞って丁寧に指導した方が良いと思う」(2.70点)とほぼ中間的な得点を示しているのに対し、Q 13「運動の種類を今より増やした方が良いと思う」(3.52点)がやや高めの得点を示し、Q 14「できるだけ多くの運動を経験させることが大切だと思う」(4.15点)が非常に高い得点を示していた。よって、保育士の意識としては、現在の幼児が行っている運動の種類はもっと増やすべきであり、一つの種目に偏った運動は避けるべきとの考えを持っていると推察される。吉田（2008）は、「過度に偏った運動や誤った指導は健康な心と体をはぐくむ上でも行うべきではない。幼少年期に特定の高度な技能の習得をめざそうとすることは、偏った動きの経験に終始する可能性があり、将来的にみれば不器用な子どもを作ることになる危険もある。」と述べ、幼児には一つの運動種目に固執せず、いろいろな動きを身につけさせることを推奨している。このことと本研究の結果を比較すると、保育士の意識は幼児の身体教育にとって、望ましい方向にあるととらえられる。

幼児が運動する際に、どのようなことを感じさせながら行うのがよいかという点については、Q 16「競争することも含めて運動を実施した方が良いと思う」(4.14点)、Q 17「運動の楽しさを感じさせることを重視すべきだと思う」(4.32点)、Q 18「遊びの中でいかに運動機会を持たせるかが大切だと思う」(4.27点)のいずれも高い得点を示しており、保育士の意識として、ただ単に体を動かすことだけでなく、競争したり、楽しいと感じたりすることを、合わせて運動を実施させることが大切だと考えている様子がうかがえる。吉武（2004）は、女子大学生のスポーツに対する好意度について、「自発的な競争」がスポーツの好き嫌いを決定する大きな要因になっていることを示し、競争することを楽しめるかどうか、スポーツに対する好意度を高めることを示唆している。また、吉田（2008）は「運動を自発的な遊びとして行ってこそ、運動が運動発達のみならず社会性や情緒の発達にも貢献し、個々の能力を高め、意欲や態度を育てていく。」と述べ、遊びと運動との密接なかわりの意義を主張している。これらの報告と比較すると本研究の結果は、保育士の意識が幼児の身体教育にとって望ましい方向にあるととらえられる。

一方、身体教育の成果の一つとして位置付けられる体力要素の評価に関する項目は、Q 21「体力測定の記録を向上させることが大切だと思う」(2.60点)、Q 22「持久力を向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う」(3.05点)、Q 23「筋力を向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う」(3.15点)、Q 24「器

用さを向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う」(2.93点)、Q25「集中力を向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う」(3.51点)がこれに該当する。得点の傾向としては、Q25の「集中力向上重視」がやや高いがあとの要素はほぼ中間的な得点の範囲にあると思われる。熊谷ら(2011)は、幼児期の発育段階についてスキヤモンの発育曲線を参照しながら、器用さやリズム感などを担う神経系の発育が他の機能と異なって著しく発達することを示し、この時期にこれらの運動刺激や能力の向上を図る重要性を示唆している。本研究では、器用さを向上させる運動について特に重視する傾向が認められないことから、保育士の意識として、器用さを向上させる運動に対する重要性を今以上に強く持つことが望ましいと考えられる。また、森知高(2011)は「5、6歳から9歳頃は、人間の成長の中で一度だけ訪れる神経系の発達が著しく見られる時期である。また、新しいものに興味がどんどん移っていき、集中力が長続きしないが、これは自然な欲求の表れであり、多種多様な刺激を求めており、動いていないと気が済まない状態（運動衝撃）である。そのため、多種多様な動きを用意しておくことと、様々な遊びを導入していくことが非常に重要である。」と述べ、神経系の発達と多種多様な運動刺激の推奨と同時に、集中力を長続きさせることにそれほど固執する必要がないことを示唆している。これに対して、本研究では集中力を向上させたいという保育士の意識がやや高いように見受けられた。一口に集中力といっても、その内容によっては幼児にとって望ましいことであるとも考えられるが、「一つの運動を長く続けさせる」という意味での集中力である場合は注意が必要であろう。

身体運動と発育発達との関係に関する項目は、Q26「運動が苦手な幼児には全く運動させなくても良いと思う」(1.56点)、Q27「運動が苦手な幼児は否定的な自己像をもち孤立しやすい傾向があると思う」(2.76点)、Q28「幼児期の身体教育は、将来の運動好き嫌いに影響すると思う」(3.51点)、Q29「身体運動は幼児を健全に発達させる上で非常に重要なものと思う」(4.31点)がこれに該当する。得点の傾向としては、Q26が非常に低く、Q28がやや高い、そしてQ29が非常に高い得点を示していることから、保育士の意識として、身体運動が幼児の身体発達にとって非常に重要であることを認識している様子がうかがえる。これに対して、Q27が中間的な得点を示しており、運動の苦手意識が心理面にネガティブな影響を及ぼすことは特に強く意識されていないと考えられる。深谷ら(2000)は、小学生の調査の中で「運動の苦手な子は、友人関係の中でともすると孤立し、自己否定的で、抑鬱感情が強い。」と述べ、学校生活の中で否定的な自己像を形成するに至ったことを推察しており、運動の苦手さが子どもの人間形成に大きくかかわってくる側面があることを指摘している。そして、運動の苦手な子の運動能力をできるだけ高める方策とともに、運動の苦手な子を生み出さないような子育て、また園、学校での指導のあり方の開発を望みたいと述べている。このことと本研究結果を比較すると、保育士は幼児における運動の苦手意識が性格形成や人間関係など、心理面や社会面での発達にまで影響を及ぼすことを認識し、今以上に運動が苦手な子をできるだけ作らないようにする志向を強く持つことが望ましいと考えられる。

幼児への運動指導形態に関する項目としては、Q30「自由に運動させるより、一斉保育を重視した方が良いと思う」(2.74点)、Q31「一斉保育で運動させるより、自由遊びでの運動を重視した方が良いと思う」(2.95点)、Q32「自由遊びと一斉保育の両方を同じぐらいの割合で運動するのが良いと思う」(3.72点)、Q33「自由遊びの内容について指導者は口を出してはいけないと思う」(2.52点)がこれに該当する。先述のように、現状では一斉保育中心と自由遊び中心が、ほぼ半々の割合で実施される場合が最も多かったが、意識としてもこの両方を同じぐらいで行う方が良いというQ32が高い得点を示している。よって、一長一短があるこの指導形態を両方行うのが良いという意識を保育士が持っていることは、幼児の身体教育にとって望ましいと考えられ、現

状は良好な傾向にあるといえる。また、Q33が中間的な得点を示しているが、近藤（2007）が述べていたように、幼児の自発的な活動に教師が手を出してはいけないと捉えるのは誤解であるので、もう少し否定的な回答傾向を示す状況の方が望ましいと思われる。

今後望まれる対応に関する項目としては、Q34「運動施設・設備を今より充実・整備する必要があると思う」（3.50点）、Q35「指導スタッフの増員が不可欠だと思う」（3.03点）、Q36「保護者の理解が今より必要だと思う」（3.19点）、Q37「管理者（園長など上司）の理解が今より必要だと思う」（3.08点）がこれに該当する。得点の傾向としては、これらすべてが中間的な得点を示しているので、現状がそれほど深刻に改善を求めているとせず、それぞれに一定の理解があると認識している様子が見えてくる。

その他自由記述において、最近の幼児についての感想として比較的高い頻度で記されていたのは、「体力の低下を感じる」「疲れやすい子どもが多い」「身体のバランスが悪く転びやすい」「転ぶときに手が出せず大怪我をしやすい」「集中力がない」「持久力がない」などであった。これらはいずれも子どもの運動能力や精神的な強さにおける低下を懸念するものであり、改善の方策について現場で苦慮している状況があると考えられる。また、「身体教育の専門的知識が乏しいから自信を持って指導できない」といった研修会や指導力の向上を求めるものも見られた。よって、専門家による研修会の充実が求められていることが示唆された。

（4）保育環境による保育士の身体教育に対する意識の比較

保育士の経験年数や置かれている環境によって、幼児への身体教育の意識に何らかの違いがあるかどうかを見るために、項目間でクロス分析を行った結果を表4～表7に示した。

表4は、保育経験年数と意識についてのクロス分析の結果であるが、経験年数が10年以上の保育士に比べ、10年未満の保育士の方が、Q27「運動が苦手な幼児は否定的な自己像をもち孤立しやすい傾向があると思う」の項目で有意に高い得点を示した。このことは、経験年数が浅い保育士の方が、幼児の運動の苦手意識が心理面にネガティブな影響を及ぼすことをやや強く意識していることを示している。よって、今後保育経験年数が長い保育士に対しては特に、運動の苦手な子が心理的にネガティブな影響を及ぼす可能性があることを意識させるようにすることが望ましいと考えられる。

表4 保育経験年数と意識

	(単位: 点)				
	保育経験				
	10年以上 (n=126)	10年未満 (n=47)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	差
Q27 運動が苦手な幼児は否定的な自己像をもち孤立しやすい傾向があると思う。	2.68	3.04	(0.85)	(0.98)	-0.36 *
その他の質問項目					ns

*:p<0.05

表5は、幼児の身体発達に関する研修会の有無と意識についてのクロス分析の結果であるが、研修会の機会無しの保育士に比べ、有りの保育士の方が、Q9「保護者は現在の園の運動指導方針に理解がある」、Q24「器用さを向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う」の項目で有意に高い得点を示し、Q11「運動量

を今より増やした方が良いと思う」の項目で有意に低い得点を示した。このことは、研修を受けることによって、現状の運動量や保護者の理解がある程度確保されていることを確認し、幼児の運動内容については器用さを求める重要性をより認識したことを示唆している。一方、表6は、所属組織内における幼児の身体発達に関する会議の有無と意識についてのクロス分析の結果であるが、会議の機会無しの保育士に比べ、有りの保育士の方が、Q7「幼児は身体運動から健康や安全生活に必要な習慣や態度を身につけている」、Q9「保護者は現在の園の運動指導方針に理解がある」、Q17「運動の楽しさを感じさせることを重視すべきだと思う」の項目で有意に高い得点を示し、Q13「運動の種類を今より増やした方が良いと思う」の項目で有意に低い得点を示した。このことは、共有する会議を行うことによって、現状の運動の種類や保護者の理解、さらには幼児が身体運動から学んでいることがある程度確保されていることを確認し、幼児の運動においては楽しさを感じさせる重要性をより認識したことを示唆している。これらのことから、保育士が幼児の身体発達に関する研修会や組織内会議に積極的に参加し情報共有することは、幼児の身体教育に好影響をもたらす可能性が高いと考えられる。

表5 研修会の有無と意識

		(単位: 点)				
		研修会あり (n=140)		研修会なし (n=39)		
		平均値 (SD)		平均値 (SD)		差
Q9	保護者は現在の園の運動指導方針に理解がある。	3.94	(0.76)	3.66	(0.63)	0.28 *
Q11	運動量を今より増やした方が良いと思う。	3.44	(0.93)	3.82	(0.93)	-0.38 *
Q24	器用さを向上させるような運動を一番重視した方がよいと思う。	3.01	(0.82)	2.66	(0.67)	0.35 *
その他の質問項目						ns

*:p<0.05

表6 組織内会議の有無と意識

		(単位: 点)				
		会議あり (n=134)		会議なし (n=44)		差
		平均値 (SD)		平均値 (SD)		
Q7	幼児は身体運動から健康や安全生活に必要な習慣や態度を身につけている。	3.95	(0.78)	3.56	(0.98)	0.39 *
Q9	保護者は現在の園の運動指導方針に理解がある。	3.95	(0.76)	3.65	(0.65)	0.30 *
Q13	運動の種類を今より増やした方が良いと思う。	3.43	(0.84)	3.75	(0.89)	-0.32 *
Q17	運動の楽しさを感じさせることを重視すべきだと思う。	4.39	(0.64)	4.14	(0.63)	0.25 *
その他の質問項目						n

*:p<0.05

表7は、保育士以外の指導者による体操教室の実施有無と意識についてのクロス分析の結果であるが、体操教室を実施しているところの保育士に比べ、実施していないところの保育士の方が、Q18「遊びの中でいかに運動機会を持たせるかが大切だと思う」、Q31「一斉保育で運動させるより、自由遊びでの運動を重視した方が良いと思う」の項目で有意に高い得点を示した。このことは、特に保育士以外による体操教室を実施していないところの保育士の方が、一斉指導による身体運動をやや否定的に感じ、遊びの中で運動をさせようという意識を強く持っていることを示唆している。しかし、専門家による指導の効果も重要と考えられるので、直接体操教室で専門家に指導させることが難しいのであれば、例えば自由遊びの良さを活かしながら、保育者自身が専門家から学ぶ機会を持つなどして、体操教室の質的な充実を検討されることが望ましいと考えられる。

表7 保育士以外の体操教室の有無と意識

	(単位: 点)				
	体操教室あり (n=110)		体操教室なし (n=73)		差
	平均値 (SD)		平均値 (SD)		
Q18 遊びの中でいかに運動機会を持たせるかが大切だと思う。	4.19	(0.71)	4.40	(0.60)	-0.21 *
Q31 一斉保育で運動させるより、自由遊びでの運動を重視した方が良いと思う。	2.83	(0.56)	3.13	(0.63)	-0.31 ***
その他の質問項目					ns

*:p<0.05, ***:p<0.001

以上のことから、幼児の身体教育について、現在の望ましい状況と様々な課題点が認められた。本研究から考察された現状の良好な面を維持し、課題点を改善していくことで、より望ましい幼児への身体教育に貢献するものと思われる。ただし、さらに詳細な点を明らかにするためには、今後も継続して研究していく必要があると考える。

5. まとめ

本研究の目的は、現職の保育士を対象に調査を行い、保育者の考えや指導方針、幼児の運動環境など、その実態の把握と現状の問題点を考察することにより、今後の保育士教育を含めたより望ましい幼児への身体教育について、検討することであった。その結果、以下のことが明らかとなった。

対象は、大阪府下に勤務する現職の保育士184人（年齢 36.34 ± 8.30 歳，保育経験年数 12.98 ± 5.41 年）であり、比較的高い割合の保育所（園）で、幼児の身体発達に関する研修会や組織内での会議の機会、保育士以外の指導者による体操教室の機会、幼児が運動可能な運動場および屋内の遊戯室が確保されていた。よって、幼児の身体教育に対する取り組みの現状が全体的には非常に望ましいものととらえられた。

幼児の身体運動について、保育時間内では3～6歳児の1日の身体運動は平均約1時間前後であった。よって、身体運動を行う時間は適正であるが、運動の内容として高強度のものが実施されているかを今後検討して行く必要があると考えられた。また、身体運動の種類については、複合系の運動をより重視した身体教育が求められた。

幼児への運動指導形態では、実態および保育士の意識とも一斉保育中心と自由遊び中心が、ほぼ半々の割合で実施されることが、支持されていた。よって、幼児の身体教育にとって望ましい指導形態がとられている現状がうかがえた。ただし、幼児の自発的な活動に教師が手を出してはいけないという誤解がまだ十分に解かれていない傾向も認められた。

保育士の身体教育に対する意識については、身体運動が幼児の身体発達にとって非常に重要であることを認識している様子が認められ、全体的には良好な状況で幼児の身体教育がおおむね効果的に実践されていくことを期待できるものだった。しかし、部分的には課題点も認められた。特に、幼児における運動の苦手意識が性格形成や人間関係など、心理面や社会面での発達にまで望ましくない影響を及ぼすことへの認識や、器用さの向上に対する意識が弱いことなどが挙げられた。

保育士は、最近の幼児について体力や運動能力の低下の他、身体のバランスが悪く、怪我の度を軽減するための動作がスムーズにできないことを多く感じる傾向にあり、対応に苦慮している現状がうかがえた。また、身体教育の専門的知識を習得するための、専門家による研修会の充実が求められていることが示唆された。

以上の結果より、今後幼児の身体教育について、現在の望ましい状況と様々な課題点が認められた。ここで考察された現状の良好な面を維持し、課題点を改善していくことで、より望ましい幼児への身体教育に貢献するものと思われる。よって、これらのことを踏まえて保育者の研修や養成に取り組むことが重要と考えられた。ただし、さらに詳細な点を明らかにするためには、今後も継続して研究していく必要があると考える。

参考・引用文献

- 深谷和子, 及川研, 小川正代ほか (2000)「モノグラフ小学生ナウ (20-1) 運動の苦手な子」ベネッセ教育研究所。
- 春日晃章 (2008)「子どもゆとり体力を育む英才教育」子どもと発達発達5(4), 208-211.
- 近藤充夫 (2007)「保育者養成課程における「保育内容」の歴史的変遷と今後の課題」子どもと発達発達5(1), 10-13.
- 厚生労働省 (2008)「保育所保育指針」フレーベル館, 14.
- 熊谷啓子・新田晶子・山本肇一 (2011)「子どもの体力・運動能力と生活習慣等とのかわりについて —幼児期から児童期における子どもの健全な心と体を育てるために—」奈良県立教育研究所平成22年度研究紀要2, 1-10.
- 松崎洋子・無藤隆 (2011)「幼児の運動遊びに関する研究 —運動遊びの種類による運動スキル向上への影響の違い—」乳幼児教育学研究 20, 81-93.
- 文部科学省 (2008)「幼稚園教育要領」フレーベル館, 6.
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮 (2011)「幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入」平成20~22年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書(課題番号 20300204), 19-20.
- 森知高 (2011)「運動好きな子どもを増やそう!! 輝け!! ふくしまっ子体力向上プロジェクト (まとめ)」福島県子どもの体力向上支援委員会報告, 1-9.
- 中村和彦 (2007)「おとなは子どもの運動とどうかかわるべきか」子どもと発達発達5(1), 14-17.
- 杉原 隆 (2008)「運動発達を阻害する運動指導」幼児の教育107(2), 16-22.
- 田中浩子 (2007)「子どもを元気にする幼稚園」子どもと発達発達5(2), 80-85.
- 田中沙織 (2009)「幼児の運動能力と身体活動における関連について —5歳児の1日の生活からみた身体活動量を中心として—」保育学研究 47(2), 8-16.
- 吉田伊津美 (2008)「幼少年期の運動遊びの留意点」子どもと発達発達5(4), 204-207.
- 吉武信二 (2004)「女子大学生の体育・スポーツに関する研究(3) —好意度と得意度の関係を中心に—」人間関係論集21, 1-22.

Study on the teaching of physical education in early childhood : Focusing on survey of Childcare worker

Shinji Yoshitake¹⁾, Natsuko Nakatani²⁾, Yoko Kiso³⁾

1) Associate Professor, Osaka Prefecture University

2) Osaka Prefecture University

3) Doctoral course student, Osaka Prefecture University

Summary

The purpose of this study is to investigate the teaching of physical education in early childhood. The data were collected by survey questionnaire from 184 childcare workers in Osaka prefecture. We analyzed the environment of physical education for young children and awareness among childcare workers, and examined current issues and future improvements.

The main results are summarized as follows:

- The environment of physical education for young children was generally satisfactory as training opportunities for childcare workers were sufficient and playgrounds for children were secured. Also, exercise time per day was reasonable; however, the necessity to examine the strength of exercise was revealed. In addition to it, regarding the type of exercise, a combined motion was more required for physical education for little children.
- The awareness of physical education among childcare workers was good overall as they recognized that the movement and exercise were significantly important for physical development of young children. However, some problems that need to be solved partially also emerged. Childcare workers need to realize the importance of improving children's dexterity. Also, they need to understand more deeply the fact that if young children grow awareness that they are not good at exercise at an early age, it could affect their psychological and social development, such as their character formation and human relationships, in an undesirable way.

Key Words: infant physical education, growth and development, childcare, exercise instruction